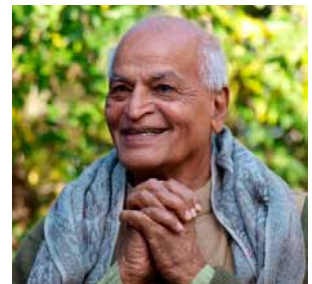


レイジーマン コーヒー 物語

LAZY MAN COFFEE STORY

明治学院大学国際学部教員
環境＝文化活動家

辻 信一



サティシュ・クマール
イギリス／スピリチュアル・
エコロジーの思想家、活動家。
「シューマッハー・カレッジ」創
設者、『リサージェンス』誌顧問

2016年12月のことだ。え、そんな最近だっけ？もうずっと昔のことのような気がする。ぼくは、友人とタイ北部のチェンマイで行われる集いに呼ばれた。詳しいことは省くが、主賓はぼくが師と仰ぐサティシュ・クマールで、香港での講義の帰りに立ち寄るのだという。ぼくと友人とはサティシュが編集した本の日本語版を製作することに決めており、その本に載せるためのインタビューをさせてもらうために、わざわざタイまで出かけることにしたのである。

講演の後のパーティで、一人の青年が、ぼくに話しかけてきた。少数民族の伝統的な貫頭衣を着た彼は英語で、「私はカレン族の村のレイジーマン・ファームから来たオシという者です」と言った。いや、その時にその全部が聞き取れたとは思えない。何を言っ

ているのか、よくわからないまま、聞き流そうとしたが、その後に、「あなたが日本のスローライフの研究家だと聞いて、会いに来ました」と言うので、ギクツとした。

聞き返すと、確かに、「レイジーマン・ファーム」、つまり、「ナマケモノ農場」と言っている。それはいいんだけど、なんのことだ、と訊くべくに、彼は、長々と答え始めた。それはまるで何も事情を知らぬ者への丁寧な説明ではなく、代わりに、「あなたならわかってくれるでしょ」という雰囲気の話なので、一向に要領を得ない。しつかりとした理解は半ばあきらめながらも、耳を向けていると、どうやら、彼は、盛んにある男のことを話している。そしてその男が何やら、森を守るために奮闘したとか、しないとか・・・。

その時、ふと、ぼくの心に、長く忘れられていた記憶が蘇った。ぼくはオシを遮って、もう20年以上前に日本の屋久島で出会ったカレン族のおじさんのことを話した。その人は、確かタイのカレン族で、ぼくがカナダのニスカという先住民族のアーティスト二人を連れて参加していた小さな集まりで、森を守るためだと言って、木にタスキをかける儀礼を執り行ったのだ。何で



チンダナイ・ジョワール（オシ）
北タイ山岳民族のカリスマ的リーダー、ジョニ・オドチャオの末娘の婿としてノンタオ村へ向かうことになった。そしてその夜、20数年ぶりに、あの男、

も、そうすることで、その木は得度して、僧侶という神聖な存在となつて、伐採から守られる、といった話だった・・・。

そこまでぼくが話したところで、オシはぼくを遮って、しかし、全く感情を表に表さずに言った。

「それはぼくの父です。父はその方法で、5千万本の木を守ったのです」

さあ、これから、ぼくたちの村に行きましよう、彼とぼくを誘ってくれたが、明日のサティシュとのインタビューがあつて、そういうわけにはいかない。サティシュにも相談すると、それは大切だ、では、明日のインタビューを終わらせてから行くことにしなさい、と言つてくれた。

こうしてぼくは次の日の夕方、迎えに来てくれたオシとその妻に連れられて、ノンタオ村へ向かうことになった。

みんなにパティ・ジョニ（ジョニおじさん）と呼ばれる人に再会したのである。会った途端に屋久島で、彼の儀礼の後でみんなで踊ったこと記憶が蘇った。本当かどうか、ジョニはぼくを覚えていたと言つてくれた。

オシの妻はジョニの9人の子どものちの一番下の娘で、オシは日本風に言えば義理の息子なのだ。ジョニという名前は日本人を意味する「ジャパニ」が訛つたものらしく、それは、彼が生まれた第二次世界大戦の末期のある日、インドやビルマから敗走してくる日本兵たちが、彼の家族の高床式の家屋の床下にたまたま逗留していたことに由来するという。カレン族はそんなふう、ちょうど生まれた時に周囲に生起する物事を赤ん坊の名前にする慣習が



北部カレン族のカリスマ的リーダー、ジョニ・オドチャオ（左）

あるのそうだ。

翌朝、ジョニ一家の家の2階から降りてきたぼくを迎えてくれたのは芳醇なコーヒーの香りだった。それはぼくがこのシチュエーションで最も期待していない匂いだった、とってもいい。台所で、ぼくのためにドリッブ式のコーヒーをいれていたのはスウェ。ジョニ夫妻の6番目の子、30代後半になる息子で、親のジョニ夫妻、他の村から嫁いだ妻、二人の幼子とともにこの家に住んでいる。

「コーヒーは好き？」と、なんと日本語でぼくに訊くのだった！

驚くことが続いていたが、中でも抜きん出ていたのは、コーヒーのうまさだった。日本にもつてきててもそのまゝ一流として通るだろう。不思議だった。自分が今一体どこにいるのか、一瞬、混乱するほどだった。なのである。そう、ここはタイの山岳民族カレンの村だ。そもそも、なぜここに本物のコーヒーがあるのか。いや本物どこ



シワコーン・オドチャオ（スウェ）
父ジョニ・オドチャオとともに、先住民族の権利闘争にも参加。その後、通信課程で修士号獲得。2009年には、栃木県にあるアジア学院に9か月間短期留学。森林農業を村人に教え、カレンの伝統を生かしながら、有機コーヒーの栽培から、収穫・焙煎、販売までコミュニティビジネスとして展開している。

ろか、日本の高級コーヒー店でしかのめないようなコーヒーが。おまけに「オーガニック」です、とスウェが世にも優しい笑顔で言う。いや、それどころか、豆はすべて天日干し、自分でつくった焙煎器をぐるぐる回して焙煎した・・・。

口をぽかんとあけているぼくに、彼はだめ押しの一品をもってきた。それはこのコーヒーを小規模のビジネスにした彼が、焙煎した豆や粉を包装するのに使っているというパッケージだった。そこに貼つてあるレベルは、木の下に寝そべっている男の絵、



そしてその下に、英語で「LAZY MAN COFFEE」とあるではないか。

さて、このレイジー・マン、すなわち怠け者とは一体何者なのか。

その前に、なんでぼくがレイジーマンでそんな衝撃を受けているかわかっていただために、語っておくべきことがある。

ぼくがナマケモノという動物に南米エクアドルで出会ったのが、今思えば、ジョニと最初に屋久島で会ったのと同じ頃だった。そしてこの動物に魅了され、その生息に多くを教えられ、気がついたら、仲間たちや学生たちとナマケモノ・ムーブメントを始めていた。ナマケモノを救おうという運動ではない、ナマケモノになろう、という運動

だ。ナマケモノになって、自分たちを、そして世界を救おう、というのだ。

1999年にナマケモノ倶楽部と一緒に立ち上げたのは、同じエクアドルで、鉱山開発に反対して、森を伐採しない森林農法の有機コ

ーヒーを軸にした持続可能な暮らしを提案していた現地住民たちを支援し始めたばかりの中村隆市だった。日本のフェアトレードの先駆けでもある彼は、このコーヒーを日本で広めるために、森を守るナマケモノ・コーヒー、というコンセプトをつくった。その後わがナマケモノ倶楽部が展開するスロ―・ムーブメントの中心には常に、このナマケモノ・コーヒーがあつたのである。

さて、ナマケモノが生息しているわけでもないタイでなぜナマケモノなのか、そしてなぜコーヒーなのか。ぼくはジョニ、スウェ、オシから話を聞いていった。12月の最初の訪問ではもちろん時



ナマケモノと筆者

間が足りなくなり、ついで翌年2月、また7月と訪問を重ねることになった。

6年ほど前のこと、タイ最大のグローバル大企業のこと、タイ最大のグローバル大企業のCPが、銀行を伴って、ここから1時間半ほどのカレン族の村に登場した。融資を受けられるから、トウモロコシを栽培しなさい、と勧誘する。明らかに遣伝子組み換えだ。採種は禁じられているおり、種は化学肥料や農薬とセットになっている。一度融資を受け始めたら、その借金を返すためにも、毎年買い続けるしかない。その村ではこれを受け入れ、コーンの単一栽培となつてから、雨の度に表土が流出する。だからもつと化学肥料を投入する必要がある。それでまた砂漠化が進行するという悪循環に陥って、あつという間に抜け出せなくなつてしまった。

これを傍目に見ながら、このノンタオ村をはじめとする他の少数民族の村々にも危険が迫っていることをスウェたちは察知した。ノンタオ村でも同じことが起こるのを阻止しようと、みんなで何度も会議を重ねた。そして、

外から持ち込まれるコーンのような換金作物の代替案として、スウェたちが考えたのが、コーヒーだった。

スウェは東日本大震災の前に栃木のアジア学院に1年間、留学していたことがある。その時に、オーガニックの農法だけでなく、グローバル化によって破壊されたローカル経済をどう立て直していくかについても学んだ。他国の留学生の中には、コーヒーのフェアトレードを軸にして、地域の農業を立て直そうという志をもつ者もいただろう。

実はコーヒーはノンタオ村にとって新しいものではない。40年も前に、当



ノンタオ村の風景

時の国王と政権が「ロイヤル・プロジェクト」の名のもとに、農村近代化の一環として導入したものの、コーヒーがあつた。農業の近代化とは世界中の途上国を中心に進められた「緑の革命」である。コーヒー栽培が始まったが、うまくいかず、みんなが放棄。その後、コーヒー畑だった所は、森になっていく。それでも、各家の敷地や森の中に、あちこちコーヒーの木が残って今にいたるというわけだ。

さて、このロイヤル・プロジェクトの目的の一つとして国家の防衛政策があつた。インドシナ戦争とその後混乱を経て、難民、そして国境紛争という大問題が続出。国境に近い奥地で深刻になったのが、手っ取り早い現金収入のための阿片のためのケシの栽培だった。これにカレン族を含む多くの山岳部族が手を染める。自分自身麻薬に溺れるものも急増した。ジョニの父もその一人だった。

このケシ栽培に替わるものとして次々に提案される換金作物をノンタオの人々も試していった。ジョニはその頃、ロイヤル・プロジェクトの先頭にたつて働く優秀な農夫だったという。彼はばくくに、その頃彼が3年連続でコーヒー栽培の最優秀賞を取った時の賞

状をニヤニヤしながら見せてくれた。その頃、コーヒーをやるために融資を受けた者の中で、なんとか負債の淵から抜け出すことができたのは、ジョニくらいだったらしい。

そんな優秀な農夫だったジョニに転機が訪れる。時は70年代の終わり。

何かがおかしい、何かが。何年も彼の中にわだかまっているものがあつた。それが何であるのか、だんだん明らかになってきた。これは、自分の生きたい生き方ではない。これは、プガツニョー（カレン族の自称、人間の意）の生き方ではない。「これ」というのは、この外から持ち込まれた近代的な農業のやり方であり、それに従事してお金に換えるために作物をつくるやり方のこと。そして、大きな仕組みの中で、借金の罠にはまって、コミュニティも家族も失っていくような生き方。借金で買った機械のために人間の最良の伴侶だった水牛を手放したり、農業に頼って大地を傷つけたり……。こんなことをして私は幸せではないし、誰も幸せにはできない。

そのことがはつきり見えてくると、ジョニは、様々な農業のプロジェクトから手を引いた。そして、毎日、金に

なる仕事もしないでブラブラし始めた。妻は激怒した。私はこんな怠け者と一緒になったつもりはない。妻ばかりではない。あいつは頭がいかれてしまったらしい、という噂が広まった。

実は、ジョニの心のうちには、カレン族に伝わる民話のヒーロー、「レイジーマン」が蘇りつつあつたのだ。彼が生まれ育った戦争末期から戦後には、疫病が猛威をふるい、カレンをはじめタイの山岳地帯の部族は多くの死者を出している。ジョニの母は5人の子どもを産んだが、ジョニを除く4人



は次々に死に、彼女自身も、ジョニがわずか8か月の時に亡くなった。ジョニの妻も、7人きょうだいのうち、生き残ったのは3人だけ。病気は戦争とともに外から持ち込まれた、と考えられている。親身になってジョニを育ててくれたのは祖母だった。親たちの世代が忙しく働いて不在がちだったこともあって、幼いジョニは多くの時間を年寄りと共に過ごした。物心つくとき水牛の世話をする牛飼いの仕事をし始める。その仕事の合間に、暇さえあれば彼は長老たちのところにいつては神話や民話を聞き、祭りや儀礼の時に唱える詩を覚えてもらつたという。せがまれるままに何度も同じ話を繰り返すうち、物知りの年寄りたちは、「もうお前に教えることは何もなくなつた」と言つたという。

昔話の中には、度々「孤児（みなしご）の苦勞」、というテーマが現れる。ジョニはこの民話の中の孤児と自分自身とを重ねるようにして、老人たちの話に聞き入つたのだという。この「孤児」は、民話の三大ヒーローの一人。二人目は「未亡人」、そしてもう一人が、そう、「レイジーマン」（怠

け者」だ！

レイジーマンは、カレン語で「ジョクドー」。例えばこんな話がある。

一人息子のジョクドーは、両親と祖母と共に何不自由なく暮らしていた。両親の死後、祖母は面倒くさがって、ジョクドーにわずかな米と水しか与えなかった。怠け者の彼は、食事をするのが面倒なので、右の手首にまいた紐にご飯をぬりつけ、左手首の紐に水をしみ込ませておいて、あとはただ、寝て暮らす。居眠りし、こっくりしては右の手首の米を食べ、左の手首の水を飲んだ。

フルーツがたわわに実っているからとりに行こうと誘われても、行きたがらない。でもしみに友だちが何人かで無理やり連れていく。でもジョクドーだけは億劫がって自分で手にとってそれを口までもっていきこうとすらしない。ただ寝そべったまま、フルーツが口に入るのを待つ。人が来て「何をしている」と尋ねると、「待っている」とだけ答える。道の真ん中に寝そべっているの、仕方なく人々は彼をまたいだり、回り道をしたり。やがてお姫様が通りかかる。何度か通り過ぎた後、戻ってきて、彼の口に果実を入れてあげた。

げた。

誰かがこれを王と王妃に告げ口した。それを聞いて怒った王は姫を勘当して城から追い出した。

追い出された姫はジョクドーのところにいき、一緒に暮らすようになった。祖母との3人暮らし。ジョクドーが何もしないので、仕方なく祖母と姫とが働く。田んぼにも行こうとしない。しかしある日、姫が頼み込んで、やっとのことで、ジョクドーを田んぼに連れ出す。雨が降り出した。田んぼでジョクドーは働こうとせず、ただ寝て、口を開け、雨水を受けるだけ。あきれて祖母と姫とは先に帰ってしまう。

その時、虹が出ているのを見て、ジョクドーは言う。「虹は俺よりもっと怠け者だ。寝てばかりいる」と。するとそれを聞きつけた虹が怒って、ジョクドーの口に入る雨水を横取りする。



怒ったジョクドーは虹に向かって石を投げた。するとそれが当たって、虹の歯が落ちてきた。

その虹の歯を使って、周りの草を刈ってみたら、驚くほどの鋭さで、あっという間に刈ることができた。家に帰ると、祖母がまた「怠け者」と罵る。しかし、ジョクドーは「でも、草をみんな刈ったよ」と。

収穫の時期がやってきた。姫と祖母が「頼むから手伝って」と懇願した。じゃあ、一回だけ、と引き受けてやってみた。やり出すとなぜか楽しくなつて、気が付いたら、あつと言う間に収穫作業はすべて終わっていた。そして田んぼから田んぼへと、多くの米を収穫した。

その噂が広がって、やがて王の耳に入った。「姫に罰を与えたはずなのに・・・」。一体何がジョクドーに起こったのか、好奇心にかられた王は二人を訪ねた。そして不思議な力をもつジョクドーの姿に驚いた。しみに、自分より、ジョクドーの方が上だ、と認めざるを得なくなり、またその力を見抜いて彼と一緒にあった姫を誇りに思うようになった。そして二人に

たいそうなご褒美を与えることになったとき。

この話をばくに終わったジョニは、「これが怠け者の知恵というものだ」と言い、さらにこうつけ加える。

「私は王、王妃、そして姫君に合計五度も会った。政府と長い間闘ってきた私に、彼らは興味をもって、わざわざ会いに来てくれた。そんなことが可能だったのは、私がジョクドーの教えから学ぶことができたからだ」と誇らしげに言うのだった。「孤児」という言葉と「痩せている」と言う言葉はカレン語では同じ言葉。ジョクドーも両親に死なれた一種の孤児だ。ジョニは昔話を聞かたびに、まるで自分自身を孤児やジョクドーと重ね合わせて、自分がまるでヒーローであるかのようにワクワクしながら聞いたものだ。そして今もこれらのストーリーはその力を失っていない。今は昔より孤児は少ない。でも、子どもと親たちとのつながりは強いかというと、そうとは言えない。恵まれていれば、お金があればそれだけ幸せかと言えば、そんなことは言えないのだ。

かつて、お金になる仕事を、「これはプガツニョー（人間）がすることでは

はない」と言って放り出したジョニの心の中に、このレイジーマンの物語が蘇ったのである。その頃、彼はこう思ったという。貧乏人は貧乏人らしい生き方をするべきで、金儲けに走るべきではない。我らプガツニョー（カレン族）は、かつて全く金なしに長い間生きてきた。それが貧乏だというなら貧乏人らしく生きよう。

さて、レイジーマンが乗り移って、妻からも、そして村中から頭がおかしくなったのではないか、と思われたジョニはその後どうなったろう。貧乏になつたのは彼ではなかった。皮肉なことに、政府の指導で、農薬や化学肥料、農機を取り入れながら、換金作物の単一栽培に励んだ農民たちは、融資の返済に追われるようになる。借金を返すために、さらに借金を重ねる負債地獄に陥り、日々の食べ物に事欠くような農家も続出、若い男たちが都市に出稼ぎに行くのが当たり前になる。

しかし、9人の子どもたちを育てているジョニの家だけはいつもふんだんな食べ物があった。レイジーマン・フアームと呼ばれるジョニ家の農場は、水牛のための草場、田んぼ、果物の木を中心とするフォレスト・ガーデン、



そして建材などを供給する森林などからなる。自給用にとどまらず、フルーツ、竹、加工食品など、現金源も豊富だ。森林農業、日本で言えば里山の暮らしである。

ジョニを叱った妻はまた彼を誇りに思うようになった。9人の子どもたちも、その配偶者たち、そして孫たちも、自分がレイジーマンの一族の者であることを誇りにしている。

6番目の息子スウェにとって、レイジーマン・コーヒーとは、森林農業による自給的な暮らしと、それを基盤とする地域経済を持続していくための手段としての協同組合的なローカル・ビジネスなのである。彼と妻は、幼い子

どもを保育所や幼稚園や小学校に行かせず、ホームスクーリングで育てようと考えている。外から押し付けられた教育が、カレン族の文化を破壊するのに重要な役割を果たしてきたのだから、そろそろ、その教育をもう一度自分たちの手に取り戻したい、と考えているのだ。

ジョニの9番目の子どもと結婚したオシもまたレイジーマン一族の一員である。彼はジョニがそうだったように、長老たちの話を熱心に聞いて文化の伝承者になろうと決意した。彼は今、ジョニの家から歩いて数分の両親の家の周囲に、伝統的な高床スタイルの建物を建てて、そこを「レイジーマン学びの家」とした。

とはいえ、移動型の焼き畑耕作を中心とする伝統的な生き方へ戻ることはできないだろう。自給100%の村も今となつては夢のようだ。外の世界との関わり合いの中で、持続可能な新しい生き方を模索していくしかない。スウェはそう考えている。

ジョニはこうも言う。「天国と地獄の間は三步しかない」という諺がある。天国の側の一步にはありとあらゆる歓びと幸せがある。

地獄の側の一步にはありとあらゆる悲しみと不幸がある。真ん中の一步が、私たちの暮らすべき世界である。

2017年7月末、中村隆市とともにジョニとその一家をノンタオ村に訪ねた。森の中にコーヒーを植えた場所を視察にいった。陽がほとんど入らない場所ではあまり実をつけない所もあったが、概ね、コーヒーの木は大きくて堂々として、健康そうだった。先に立つて案内してくれるオシが後ろを振り返ってこう言った。「このコーヒーは200%オーガニックですよ。森の精霊たちが面倒を見てくれているおかげで育っているんだから」



森の精霊とともに育つ 200%オーガニックのコーヒー



右より中村隆市、スウェ、筆者

なるほど、とぼくは素直に納得した。世界中、オーガニックというカテゴリーの中にはピンからキリまで含まれている。本当にこうした本物の森の中で育っているコーヒーまで同じ名前ではか呼べないのはもったいなさすぎる。ぼくはその時、LAZY MAN COFFEE という名前に込めたジョニー族の思いの深さがやっとわかったような気がした。

レイジーマンとは何か。ナマケモノとは何か。それは、この世界の自然生態系に全面的に依存してこうして生きている自分の存在、つまり母なる自然の子どもとしての自己の認知である。そして、その母への感謝であり、その母に対して犯してきたすべての罪への謝罪であり、その回復と永遠なる健康への祈りである。

Local is Beautiful～「しあわせの経済」世界フォーラム 2017 in 東京

日本初開催！ 11/11（土）、12（日） 13 か国 30 名のリーダーが集い 「しあわせの経済」への道筋探る



気候変動や経済危機、富の格差、心の病の増加など、世界共通の課題解決に向け、地域のコミュニティや生態系を基盤とした「ローカル経済」の役割を議論する「しあわせの経済」世界フォーラム 2017 in 東京が 11 月 11 日（土）、12 日（日）、都内で開催される。

同世界フォーラムは、インド、ラダック地方での暮らしから、現代社会に「豊かさ」を問い直し、世界 40 か国に翻訳されている『懐かしい未来』著者、ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ氏（71）が、2009 年よりアメリカ、イタリア、インドなど各国で開催してきたもの。日本では初の開催となる。

主催は、ヘレナ氏が代表を務めるローカル・フューチャー（イギリス）と、日本の環境・社会運動や国際協力に取り組む市民団体、北海道から福岡までの地域で活動するグループ、パルシステム生活協同組合連合会、アウトドアメーカーのパタゴニア、城南信用金庫などの企業、**明治学院大学**や**日本大学のゼミ**など、50 を超える団体で構成される**実行委員会**。事務局は、スローライフを日本に提唱した文化人類学者の辻信一氏が世話人を務める環境 N G O ・ナマケモノ倶楽部（東京）。



2 日間にわたるフォーラムでは、「グローバルからローカルへ」という視点を、**1 日目（前売 3000 円）**は世界の事例発表に学び、**2 日目（入場無料）**は 12 を超えるテーマ別分科会を中心に、日本の実践者との対話や意見交換のほか、ブースやマルシェが予定されている。

緊急
告知

タイ・カレン族の青年、スウェとオシがまほろばに！ 彼らが淹れる現地の秘蔵コーヒーで スローな交流のひとつときを！

●11月11日、12日と東京で開催される「しあわせの経済」世界フォーラム。「ローカル・イズ・ビューティフル」を掲げて、日本で初めて解されるこの会議には、13の国と地域から30名を超えるゲストが集い、グローバル経済が世界中に深刻な問題を引き起こす中、それにかわる「ローカリゼーション」という流れについて、その思想に触れ、具体的な取り組みに学ぶ二日間です。
●フォーラムの後、タイ、カレン族のスウェさんとオシさんは北海道に！

カレンに伝わる民話「ナマケモノ（カレン版「ものぐさ太郎」）」の教えに学び、水源や森を守ること、カレンとして生きることが自分たちの暮らしを豊かにすると語る若者2人のお話を聞く会を、まほろばさんに設けていただきました。
●「現在の、大企業だけのためのグローバル経済から、すべての人々のためのローカル経済への大転換なしに、未来はないと思っています。なんとか、「ローカリゼーション」という流れを日本でもつくりたい」とコメントするのは文



スウェ（左）と
オシ（下）

化人類学者の辻信一さん。スローでローカルでハッピーな新しい経済の担い手たちに会える貴重なチャンスです。

●当日は、スウェさんにエリクサーの水でコーヒーを淹れていただき、みなさんと飲んでいただく予定です。どうぞお楽しみに！

（ナマケモノ倶楽部 馬場直子）



ローカル・イズ・ビューティフル in まほろば

とき：2017/11.17(金)

ところ：まほろば本店 2F 11:00～12:30

会費：1,000円 定員：30名

ご予約：まほろば本店 Tel.011-665-6624 まで

※お車の方は臨時駐車場をご利用ください。